

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 3. 11

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

「永遠の命を信じる」

牧師 松谷 祐二

コリントの信徒への手紙二 第四章一四節～第五章四節

主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいておりませんが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。

(新共同訳聖書)

この号の発行日は、ちょうど二〇一一年三月一日の東日本大震災から七年目になりました。また、三月～四月は教会暦で言うレント(受難節)とイースター(復活日)の季節です。そうしたこ

とも念頭に、「テサロニケの信徒への手紙」のシリーズを一回お休みにして、上記の聖書箇所を読むことにいたします。

津波が河川を伝わって遠く内陸にまで及び、堤防を越えて氾濫。家も車も橋も、すべてを呑み込み、押し流していくあのショックな映像を、久しぶりに見ました。涙なくしてはとも見ることができません。大惨事を経験すると、二度と同じような目に遭わないように次に備えよう、決して風化させないようにしよう、と思います。その思いと努力は大切です。しかし、それでもやはり惨事は時とともに風化し、形を変えながらもまた繰り返されてしまう。これも現実です。

現実として直視しなければならぬ、根本的なこともあると思います。わたしたちの命は、実に、常に死と隣り合わせであること。特に自然災害、大災害に限ったことではありませんけれども、かように突然に、あつげなく、終わってしまうこともある、それが私たちの、この世の命なのだということ。

「からだのよみがえり、永遠(とこしえ)の命を信ず」とキリスト教会は「使徒信条」で言い表します。体の復活と、来るべき神の国における命を信じる、と。死というものをリアルに感じていない時には、「復活」など荒唐無稽な空想と思っても分けられません。しかし、死というものを直視すれば分かれます。復活こそは、わたしたちすべての人間にとっての一大問題だと。「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」このことを知っているか、本気で信じているかどうかで、人間はまったく違うものになりうると。

パウロが書いた通り、主イエスの復活、また自分自身の復活を信じて生きる人は、落胆しないのです。地上の命は過ぎ去るが、恵みとして与えられる神の国における命は、永遠に続く。地上の命の終わりは、天上の命の始まりである。このことを本気で信じて地上を生きる人は、落胆しないのです。それはもちろん、一時的には落胆すること、くじけることも、いくらかもあるでしょう、しかし

最後まで絶望で終わりはしません。

復活の信仰は、現実逃避ではなく、現実を直視したものの見方です。もし「永遠の命こそが大事だから、その手前の短いこの世の命はどう生きようが構わない」とでも言う人がいるならば、それは「現実逃避だ」との非難を免れないでしょう。実際、古代世界ではそれに近い思想が流行しました。この地上の肉体は、崇高な靈魂を閉じ込めた牢獄のようなもので、死とは、不自由で下等な肉体を脱ぎ捨てて、靈魂が自由になることである、という理屈です。この思想によって死への恐れがやわらかく半面、肉体をもつてする生活は価値のないものだから、食事を断って肉体の牢獄を破ろうというような極端な苦行・禁欲に走る人々が出た。正反対に、下等なこの世の肉体ではどう生きよう構わない、ということでも存分に不道徳な楽しみにふける人々が出たりしました。

パウロは、「外なる人」は衰える、わたしたちのこの地上の命が心身ともに終わりを迎えることは必定だと言いました。それは幕屋、テント、仮設住宅のようなもので、いつかは解体されるのだと。見えるものは過ぎ去る、とも言いました。

それに対して、「内なる人」——これは精神とか靈魂とかではなく、イエス・キリストに結ばれた人間の存在そのもの、という意味です——これは、見えないものだけれども永遠に存続する。地上のすみかである幕屋、この世の命が終わっても、わたしたちは復活して、仮設ではない永遠の住みかを与えられるのだと、パウロは言いました。

しかし、あの流行の思想とは違うのだということも、忘れずに付け加えています。「それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。」この世の命はどうでもいいと現実逃避しているのではない。はかなくとも、それを大事にしたい。その命をもつて、艱難をも耐え忍びながら、主イエスに喜ばれる生き方をしたい。主はわたしたちをいとおしんで、地上の住みかが減びるときにも、永遠の住みかを上から重ね着させるようにして覆ってあげようと、待ち構えるようにしていらっしやる。それほどに、この世でも来るべき世でも、わたしたちを愛してくださるからです。

帯広から

本田 タツ子

聖名讃美

一月二十四日、少し遅れて昼過ぎの帯広空港につきました。見渡す限りの牧草地は、雪に覆われて防風林が寒々と立っていて、北へ来た実感しました。

帯広は毎日雪が降るのではなくて、数日は晴天で、まばゆい程の日差しがあつて、部屋の中は暖かです。

二年前、横浜に戻り、転会させていた矢先に、体調を崩し、歩けなくなりました。苦しい日を過ごすことになってしまいました。やっと半年程前から、何とか月に一度位、出かけることが出来るようになります。ご一緒に礼拝を捧げることが出来ましたのは、本当に嬉しいことでした。

何もかもおぼつかない私を、教会の入り口の階段では、どなたかが手を差し伸べてくださり、助けていただきました。とっても暖かく迎えていただいて感謝しています。二十数年間の麻布南部坂教会生活の中で、お導きいただいた先生方、引越された



撮影 2017年5月

方、体調がすぐれず、お休みの方、そして今なお優しく励まして下さる沢山の方々に支えられて

きたことをつくづく思い、感謝でいっぱいです。

レントに入り、十字架の主をおしのびするこの時期、共に過ごさせて頂いた頃を、お一人お一人のお顔と共に思っております。信じられないくらいおとなしかった「ひかるちゃん」のことも。

「遠くに行っても主にあって一つだから」とおっしゃってくださった原姉、今、しみじみと心に深くかみしめております。「主と共に在りて感謝」であります。

ご挨拶が出来ずに来てしまった方々に、お詫び申し上げます。

松谷先生はじめ皆様、本当にお世話になりました。

ありがとうございます。皆さまの御健康が神様に護られますように、お祈りしております。

報告

*高橋優美子神学生は、二月十三日から二十一日にかけて、神学生チームによる秋田地区諸教会の雪かき奉仕に参加しました。また二月十八日(日)は、大曲教会において主日礼拝の説教奉仕にあたられました。

*渡邊文香姉のご両親(長野在住)が二月十一日(日)、倉形眞弓牧師(日本基督教団アガベシッパ教会(練馬区))の司式により洗礼を受けられました。主の祝福を心からお祈りいたします。

*教会修養会・西南支区信徒研修担当主催の信徒研修会に参加しました。

二月二十五日(日)午後三時～五時 日本基督教団美竹教会にて テーマ「伝道」講師 深井智朗先生

(東洋英和女学院院長)

各部報告 二月度

成人会

日時 二月十八日 主日礼拝および会堂

場所 教会堂会議室

出席者 八名

開会祈祷 菊池才知子姉

内容 エレミア書 五十章から五十二章まで 五十、五十一章 神の公平な審判と救いは全世界を対象としていることを暗示している。神の言葉はすべて成就してきたし、これからも成就するであろうと暗示されている。

五十二章 ユダの王ゼデキヤは、神の目に悪とされることをことごとく行つた。主の怒りによってエルサレムは陥落し、ユダは主の御前から投げ捨てられた。バビロンの王ネブカドレツアルの親衛隊長ネブザルアダンがエルサレムにやって来て、主の神殿、王宮、市街を破壊しつくし、貧しい人の一部を残して人々、総数四千六百人を捕囚としてバビロンに連れ去つた。二節ずつ全員で輪読し、松谷牧師の解説を聞き、各自感想交換の活発なディスカッションをした。

次会は、次年度活動計画と会長選出 次回司会：三月十八日 司会は鈴木晋兄 閉会祈祷 黙祷

婦人会

日時 二月十一日 主日礼拝後

場所 教会堂会議室

出席者 七名 開会祈祷 黙祷

閉会祈祷 各自小祈祷 内容

一、聖書研究「ヨシユア記」一五、六章

五章 イスラエル人が、神の守護の下にヨルダン川を渡つたことを知つた西岸のアモリ人、沿岸地方のカナン人の王たちはイスラエル人に立ち向かうことの無力を悟つた。その時、主はヨシユアにイスラエルの人々に割礼を施せと命じられた。脱出後途中の荒野で生まれた者は割礼を受けていなかったからである。ヨシユアは、神がお立てになつた彼らの息子たちに、割礼を施した。割礼によってエジプトでの恥辱を取り除かれ、エリコで過ぎ越し祭を祝つた。その土地の産物で酔母を入れぬパンに焼いて食べた。その日以来必要でなくなつたマナは絶えイスラエル人はカナンの土地で取れた収穫物を食べた。割礼と種入れぬパンは、洗礼と主の聖餐の伝統になつてきた。五・一三～一五 主のみ使いは臨在する。

六章 どのようにしてエリコを占領したか、神の命によって滅ぼしつくす、全部を神に帰するということ。ヨシユアは先般エリコに派遣した二人の斥候に協力した娼館の経営者、ラハブとその一族・縁者を、約束通り生かしておいたので現在(この章が記述された当時)もイスラエルの中に生存している。

次回 三月二十五日「ヨシユア記」七、八、九章を学ぶこととする。

二、神学基礎講座「教会音楽」を受講した佐藤マリエ姉に受講内容の概略をお話し頂いた。